

人麻呂歌集「月船」歌の表現

松田 浩

―漢語の見立て表現と訓読―

一 はじめに

『万葉集』巻七の冒頭、「詠天」の題のもとには、

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見

(7・1068)

という人麻呂歌集歌（非略体）が収載されている（以下、本稿ではこれを「月船歌」と称する）。一首は、天に雲が立ち、月が星々の中へと移りゆく実像（実意としての景）を、海に波が立ち、船が林の中へと傍ぎ隠れる幻像（見立ての文脈）の上に重ねる。実意としての景（月の移動）が見立ての文脈（船の移動）に重なり、両者が一如のものとなることで、月が渡り行くという日常的な天空の景色は、現実の視覚では捉えられない、詩的想像に支えられた幻想的光景として顕現する。

本稿では、右の「月船歌」に見える実景と見立ての景との重層化の表現、およびそれを歌として訓む際の訓のありかたを表現の型と捉えて考えてみたい。そのことによって、漢詩文に見られる漢語的な造語法が、いかにして文字の歌という位相において可能なものとなったのかという問題の一端が見えてくるで

あろうとの目論見をもつてのことである。

二 漢語的表現による見立て―「天海・月船」―

「月船歌」において、実像と幻像とを重ねるのは、「天海」「雲之波」「月船」「星之林」の表現である。この四つの語彙を構成する漢字は、それぞれ「天―雲―月―星」（天空の景）、「海―波―船―林」（海辺の景）の縁語関係を結び、文脈を形成している。実像としての景を構成する語群の文脈と幻像のそれとを示せば、

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見

○…実像を構成する語彙 ●…幻像の景を構成する語彙

◎…二つの文脈に参与する語（以下同）

となる。題詞に「詠天」とあることが、二つの景のうち、天空の景が実像であることを保証しているが、「月船」の述語「榜隠」の「榜」が海辺の景（幻像）の文脈上にあつて天空の景（実像）の文脈には直接的には参与しないというあり方からは、海に波が立ち船が林に傍ぎ隠れるという海辺の景の文脈が基盤となつて、そこに天空の景が重ねられていることが看取される。重ね

られた二つの文脈は、漢文表現の特徴的技法である互文の關係で互いの文脈(景)を構成しつつ、照らしあう關係となつてゐる。

「天海」の語は、齊・孔稚珪「褚先生伯玉碑」に、

子晉笙歌馭鳳於天海、王喬雲舉控鶴於玄都。

などの例を見るように、天の青く広い性質を海のそれと重なるものとして捉え、天空を海に喩えた漢語である。「月船歌」では、この漢語「天海」の文字列を漢語表記そのままの姿で歌の文字列に組み込み、「天」すなわち「海」という見立ての關係を表現する。一方、「月船」の用例は、諸注が指摘しているように、「懷風藻」および「万葉集」に、

月舟移霧渚、楓櫂泛霞濱^①。

天海^{あめのうみ} 月船浮^{つきのふね} 桂櫂^{かつら} 懸而滂所見^{かけてこくみ} 月人壯子^{つひとをとこ} (「懷風藻」15・文武天皇「詠月」)

(10・一二三三・「詠月」)

という用例が見られるものの、漢籍に用例を見出すことは難しい。それ故に、「月船歌」の表現については、小島憲之の「月をもつに見立てる方法は、六朝唐代に例が多く、このやうな方法を學んだ結果、「月の船」が生まれたものかとも思はれる^②」との指摘がある。さらに丸山隆司は、小島のこの指摘を展開させて、「月船歌」の表現を文字(漢字)でつくる歌における詩語の創出の問題として論じている。既に丸山論文に詳述されているように「天海」や「月船」のように、実像と幻像とを漢字二字構成の熟語として表現することは、漢詩文において見られる技法であり、「月船歌」の表現はこの技法を歌に取り入れたものである。ここに「懷風藻」から例を示して確認しておきたい。

雲衣^③・兩觀夕、月鏡^④・一逢秋。

(「懷風藻」33・藤原不比等「七夕」)

右の藤原不比等の七夕詩には「雲衣」「月鏡」の語が見られる。実像としては、七夕の夜にたなびく雲と、皓々と照る月とが空に浮かんでいる景であるが、そこには同時に織女の衣と鏡という幻像が重層する。織女を持ち物としての鏡は、梁・沈約「織女贈牽牛詩」に「紅粧與明鏡」「二物本相親」などの例が見られ、また、織女の衣を「雲衣」として捉えることは、唐・杜審言「奉和七夕侍宴兩儀殿應制」に「斂淚開三星」「微步動雲衣」などの例を見る。七夕の夜の雲と月とは、織女の調度品としての「明鏡」(屢々月の比喩として用いられる)とその衣裳たる「雲衣」という漢籍由来の知識を背景として背負い、天空の景であると同時に、その夜空に住まう織女の着ている雲の如くに薄らかな衣、彼女の持つ、月の如くに澄みわたった明鏡という幻像を結ぶ。ここでは「雲・月」という実像に対して、見立てるものとしての「衣・鏡」が下接して二字の熟語を構成する。これら見立ての幻像と実像との二字熟語として用いられる「雲衣」「月鏡」の語は、

月鏡^⑤如開匣、雲纓似綴冠。(唐・李嶠「八月奉教作」)
歷歷珠星疑拖佩、冉冉雲衣似曳羅。

など、中国の漢詩文においても用例を見ることができる。李嶠「八月奉教作」においては天空に現れた満月を匣を開いて姿を現した鏡に、空に細く漂う雲を冠を紐に見立てており、また、何仲宣「七夕賦詠成篇」においては、夜空にくっきりと浮

かぶ星々を珠玉に、しなやかで柔らかな様子の雲を織女の衣に見立てる。不比等の七夕詩に見られる「月鏡」「雲衣」の直接の典拠を示すことは無論できないことだが、海彼における漢詩文の語彙をここに用いたものであろうことは疑いない。この「雲衣」は更に、小島憲之の指摘するように『万葉集』の、

天漢^{あまのうみ} 霧立上^{きりたてあがり} 棚幃^{たなだの}乃^{なり} 雲衣^{くもえ}能^の 飄袖^{かぜのうで}鴨^{がも}

(10・二〇六三・七夕)

の歌にも見ることができ。ここでは、詩語「雲衣」の文字列がそのまゝの姿で訓字主体表記の歌の文字列に組み込まれて「くものころも」という新たな歌語―詩語の翻訳語としての歌語―が形成されている。右の歌では漢語「雲衣」を背景に、雲がすなわち織女の衣であることを発想の起点として、霧が立ち上るさまを、その衣の袖が翻ったものとして疑ってみせることに主眼があるが、漢語「雲衣」の熟合のあり方が、雲と衣とを同一のものと見る前提を作り上げているのである。

「月船歌」における「月船」も、右に見るような漢字の持つ実像・幻像の熟合の語構成を用いた技法であることは明らかである。天を海として見る漢語「天海」によって、天に浮かぶ月が船であるという幻像が喚起され、それによって「天海」と語構成を同じくする「月船」の語を創り出すことが可能となる。幻像がつくり出す文脈に実像が絡め取られて、景色は一転して幻視の対象として生成する。

このように漢詩文の語構成をそのままに歌の文字列に持ち込むことで、歌はその表現技法を漢詩文と共有することが可能となる。こうした表現法が方法化されるのは、漢詩文隆盛の天智

朝を経た天武朝の、人麻呂歌集略体歌（詩体歌）以降においてのことと考えられる。稲岡耕二によれば、人麻呂歌集略体歌（詩体歌）の書記方法―総訓字表記を志向する歌の書記方法―は、書記言語としての文字の歌を創るという営為によるものであった。そしてその営為は、漢語の語彙をそのままの姿で歌の文字列に取り込むことを可能にする。その一例として、渡瀬昌忠の示す人麻呂歌集略体歌と漢語訓読との関係を以下に確認しておきたい。

人行^{あまのり} 不^{あは}相^{あひ}妹^{いも}故^{ゆゑ} 久^{ひさ}方^{かた} 天^{あま}露^{つゆ}霜^{しも} 沾^{ぬれ}在^{にける}哉^{かも}

(11・二二九五)

の初句に見られる「人行」は漢詩文に見られる漢語の訓読によって創り出された新たな文字の歌のための歌ことばであった。漢語「人行」は、『文選』巻二九「古詩十九首」の第一に、

行行重行行、與^レ君生別離。

相去萬餘里、各在^二天一涯^一。

道路阻且長、會面安可^レ知。

と見える例をはじめとして、漢詩文においては、愛する人・親しき人と遠く離れ行く生別離の、悲痛なる行路のさまを表わすものとして使われてきた表現の蓄積を持つ言葉である。二二九五番歌はその詩語をそのまま歌の文字列に組み込むことで、詩語としての「人行」の持つ分厚い蓄積を引き受けつつ、一首を作り上げている。歌は漢字による表記（訓字表記）を志向することで、訓読という回路によって和漢の枠組みを越境する。歌はそのことによって漢籍の持つ豊富な語彙と、その語彙が詩語として蓄積してきた表現の歴史を自らのものとし、漢語

世界と地続きの、東アジア漢字文化圏の一端である日本における詩文という位置を獲得することになる。

三 文字の歌と訓読と——「雲之波・星之林」——

人麻呂歌集非略体歌である「月船歌」における「天海」「月船」の語もまた、右に見るような訓字主体表記を志向する文字の歌として、漢詩文に見られる語彙「天海」を、そしてまた、漢語の語構成による造語法によって創出された（と思しい）「月船」を、漢語的表記によって歌の文字列の中に埋め込んだものであると言える。

だが、同じく「実像＋幻像」の語構成を持つ「雲之波」「星之林」はどうであらうか。漢語としての「之」は見立ての関係を表わす語ではない。「之」が二つの名詞を繋ぐのであれば、まずは上の語が下の語を修飾する関係を表わすものとして捉えられようが、「月船歌」における実像・幻像の二つの文脈の上では「雲之波」「星之林」は明かに見立ての関係によって成り立っている。「之」字は漢語とは別の位相で捉えられなければならないものである。人麻呂歌集非略体において、「之」字には、

海底	奥玉藻之	名乗曾花	…	(7・1190)
久方之	天漢原丹	奴延鳥之	裏歎座都	乏諸手丹

などの用法をみる。それぞれ「沖の美しい海藻であるのりそ
の花」「ぬえ鳥の、(哀しい声で鳴く) ように忍び泣いて」と解
釈されるものであって、前者は同格の格助詞「の」、後者は比
喩の格助詞「之」を表わしている。ここに歌の文字列の中の「之」

字が漢語としての「之」の原義を越えて、和語における格助詞「の」の表語文字として機能していることが確認できる。これは漢語としての「A之B」が持つ修飾関係を示す用法が和語の格助詞「の」として訓ぜられ、更にその「之」が和語「の」の表語文字として、「之」本来の字義にはなかった和語「の」の語義の広がりをも担うに至ったものであろう。「月船歌」における「雲之波」「星之林」という文字列は、明らかに和語(訓読語)としての「くものなみ」「ほしのはやし」を志向している。そこでこの訓読を志向する表記と、漢語としての姿を顕わにする「天海」「月船」はいかなる関係にあるのかが問われなければならない。

歌の音数律から言えば「天海」の訓は「あめのうみ」「月船」のそれは「つきのふね」と実像・幻像を示す二つの名詞が格助詞「の」で結ばれていることは間違いない。このことは同じ見立ての構成を以て文脈上に配される「雲之波」「星之林」が、和語における格助詞「の」の表語文字である「之」字を以て「雲之波」「星之林」を結びつけていることから了解できる。その意味では、「天海」を「あめのうみ」「月船」を「つきのふね」と訓むべきことは、歌の音数律の問題よりも寧ろ「雲之波」「星之林」の文字列において「之(の)」字が刻印されていることを根拠とすると言ったほうがよい。であれば、「天海」「月船」の文字列は、歌の文字列自身が示す訓み——実像・幻像の関係を示す語彙を「の(之)」が繋ぐというありかた——を根拠として、「天之海」「月之船」とも表記可能であることを示しているといえよう。と同時にそれは、「雲之波」「星之林」がそれ

それ「雲波」「星林」とも表記可能な語彙であるということをも意味する。

文字列における「之」の刻印が逆に「雲之波」を「雲波」として、「星之林」を「星林」として理解することを可能にしているのである。ここにおいて、漢語の持つ二字構成の見立てが持つ性質と幻像・実像の二字を繋ぐ「の」の性質との連関を考えることが必要となる。

漢字二字の熟合による見立ての構造が漢語特有のものであることについては前節でも触れたが、その上下二字が作り出す関係性を見るために、更に『懷風藻』の以下の例も確認しておきたい。

雲羅[●]襏[●]珠起。雪花[●]含[●]彩新。

〔懷風藻〕17・文武天皇「詠雪」

「詠雪」と題されることによって実像が「雲」「雪」であることが了解される。「雲羅」は光を透かすごとく雲の薄々としたさまを羅^ろに、「雪花」は雪の結晶が六つの花弁を持ちつつ散るさまを花に、それぞれ見立てたものである。この漢語「雪花」は、雪花[●]開[●]六出[●]、氷珠[●]映[●]九光[●]。

〔北周・庾信「郊行値雪」〕

のように雪を花に見立てた語として用いられることが多いが、

柳翠含[●]煙葉[●]、梅芳帶[●]雪花[●]。

〔唐・高正臣「晦日置酒林亭」〕

に見られるように雪のように白い花の意で用いられることもある。見立てるものと見立てられるものとの関係は固定的ではなく、文脈によって雪が花に、花が雪に見立てられるのである。

このことは、「雲羅」が

曠哉宇宙[●]、雲羅[●]更四陳。〔梁・江淹「雜體詩、替中散言志」〕
のように、雲を羅（この場合は網の意）に見立てた語として用いられると同時に、

長裙動[●]星珮[●]、輕帳揜[●]雲羅[●]。

〔隋・王慎「七夕」〕

のように、雲の如くに柔らかな羅の意にも用いられることにも見られる。幻像・実像を組み合わせる二字構成の漢語「AB」は、その関係性を示す語句を含み持たない。それだけに、A・Bの何れが実像・幻像であるかは不透明である。前後の文脈がこれを明確化するか、用例の蓄積による強固な関係性が構築されない限りは、見立て表現「AB」はAとBとの何れもが実像として現れる可能性を保ちつつ相互に照らし合う関係を結ぶ。

「雪花」という語それ自体は、花弁を持ちつつ風に舞い、あるいは枝に留まるという雪と花とが共有する性質によって両語の紐帯を結びながら、なお「雪」とも「花」とも決定できないところで互いを照らし合う。そこに「A如B」でも「BのようなA」でもない、漢字二字構成の見立て表現の特質がある。

既に述べたように「月船歌」の文字列は、こうした二字構成の見立ての語彙を「AのB」というかたちで訓読すべきことを指示している。熟語「AB」がAB何れもが実像となりうるところで見立て表現をつくり出すとき、そこに見られる訓読語としての「の」は、まずは『全注』などが指摘するように同格（同一判断を背景に成立する同格の結合^⑤）を表わす格助詞と見てよいだろう。同格の「AのB」はAであると同時にBである、AすなわちB、という関係をつくる。しかしまた、その一方で

漢語「A・B」が見立てとして成り立つためには、A・Bに共通する性質―見立てを可能にする性質―が保証されねばならない。丸山論文はここに、同格の意味に加えて、「の」が持つ比喻をつくる機能をも付加された特殊な用法として「AのB」を見出し、「月船歌」の「天の海」の「の」の含み持つ意味について、

「天の海」において、天の広いこと・青いこと、それは海の広いこと・青いこと、ということにおいて、天すなわち海という含みをもっている」と解せないだろうか。

と述べ、その訓みには「天の海」が「海」に喩えられた「天」そのものだけを指すというような意味での「見立て」の関係が見いだせないことを指摘する。漢語「A・B」の持つ比喻関係の相互交通性を鑑みれば首肯すべき見解であろう。「A・B」を繋ぐ「の」が一般的な和語の「の」とは微妙なずれを生じて、文法的な分類によっては比喩にも同格にも一元化できないところで機能するのは、これが見立ての漢語「A・B」を訓読語として訓む（理解する）という営為の中で見出されたものであったからではないだろうか。「月船歌」には、こうした、訓読を通して、訓読のために見出された「の」が「之」字によって刻印されているのである。

四 訓読という回路と書記言語としての歌と

「月船歌」の文字列が漢語世界との繋がりをもちつつ、そこに訓読を志向することは「天海丹」「星之林丹」と助詞「に」が書き込まれていることに明かである。「雲之波」の文字列に

よって「天海」を「あめのうみ」と訓むことを指示するありようからは、「月船歌」は漢語的表現を訓読することで、そこに歌を立ち上げらせようとしていることが看取される。そうした中で「之」を表記することは、漢語的な見立ての方法を書記言語としての歌の文字列の上につくり出す営為であったと捉えることができる。

なお、こうした営為の基層には、近江朝以来の漢文訓読の方法の蓄積が存することであろう。天智朝の大津宮時代のものとして推定される北大津音義木簡には、「賛」字に「田須久」、「誣」字（誣の異体字）に「阿佐ム加ム移母」などの訓が記されている。ここにムヤモという付属語の訓み添えがあることから、これがある特定の文脈の中で読み解かれ、訓を施されたものであることがわかる。^⑩西澤一光が詳述しているように、書記言語としての日本語は、漢語によって書く―漢語に翻訳しつつ書く―ことによって普遍的な文字言語としての漢語（中国語）の一領域に生成したものである。そして、そこでは文字における「漢語」と書記言語としての「日本語」とが訓読という回路によって繋がれていた。^⑪北大津音義木簡の存在からは、漢詩文と遠く隔たつたところにあった歌というものが、天武朝において訓読という回路を通して書記言語として新たに誕生するための素地を、既に天智朝において準備しつつあったということが知られるのである。

なお、一見和語との関係が薄いと思われる『懷風藻』の漢詩においてもその表現が和訓を下敷きにする場合がある。ことにについては、既に論じたことがある。^⑫こうした訓読という方法が、

漢詩文と歌とを書記言語として相互交通可能なものとするのであり、「月船歌」はそうした中で漢語世界の表現を訓読語として文字列の上につくり出しているのである。

注(1) 本稿では「見立てられるもの／見立てるもの」に対して

「実像(実景)／幻像」の語を用いる。ただし、「実像(実景)」は実際的な実景という意味ではない。

(2) なお、「月船歌」が人麻呂歌集所出(非略体歌)であることを慮れば、その下限を持統朝初期と見「懷風藻」の「月舟」(文武天皇作) および「万葉集」巻一〇の「月船」(奈良朝)の用例に先立つものと考えられる。

(3) 小島憲之「前期萬葉集の歌」(『上代文学と中国文学(中)』第五章(塙書房・一九六四) 所収)

(4) 丸山隆司「詩語構成論——巻七・一〇六八番歌をめぐって——」(『古代日本文学と文字』(おうふう・二〇〇四) 所収)

(5) 稲岡耕二「山上憶良」(吉川弘文館・二〇一〇)は、総訓字表記によって漢詩文の語彙をそのままの姿でうたの中に取り込む人麻呂歌集歌詩体歌(略体歌)が、書記言語としての文字の歌として成立していたことを論じている(二〇四頁～二二二頁)。なお、同書によれば、この点については稲岡耕二「漢文訓読と人麻呂歌集」(『人麻呂の工房』(塙書房・二〇一・五刊行予定) 所収)に詳述されているとのことである。

(6) 渡瀬昌忠「人麻呂歌集の略体歌と訓読漢字——「行行」の歌と文選・爾雅——」(『萬葉』二二九号・一九八八)

(7) こうした問題については猪股ときわ「万葉歌の漢字遊戯」

(『武蔵野文学』五〇号・二〇〇二)に詳しい。

(8) 「雲之波」は、「雲」という実像に「波」の幻像を重ね合わせたものであるが、厳密に言えば「星之林」は単純な景の二重化とはなっていない。代匠記が「雲ノ波、月ノ船、星ノ林モ、皆物々ニ譬ヘタル中ニ、星ハシゲキヲ林ト云ヘリ」と指摘するように、「星」はその多いさまが「林」(「あつまる」の意がある)として表現され、その多く集まっている姿において「林」という幻像と姿を重ねることが可能となるのである。この点、渡瀬昌忠「萬葉集全注 巻第七」(有斐閣・一九八五)の当該歌注に「星が多く集まっているさまを林に見立てる。漢語としての「林」にも多く集まる(聚ナリ)広雅」の意がある。」と記す通りである。

(9) 『時代別国語大辞典 上代編』(澤瀉久孝等篇・三省堂・一九八三)の「の」の項目における【考】。

(10) 東野治之『書の古代史』(岩波書店・一九九四)

(11) 西澤一光「上代書記体系の多元性をめぐって」(『萬葉集研究』第二五集・塙書房・二〇〇一)。なお、この点については拙稿「上代文学における文字と歌」(『日本文学』二〇一・二月号)も併せて参照を請う。

(12) 拙稿「懷風藻「月舟」詩における「楓楳」」(吹原豊編『日本語・日本文化の発信・受容・変容に関する基礎的研究Ⅲ』二〇一〇)、および「懷風藻」地名表記の文字列——表意と表音のあい——(『文学』第九巻一号・岩波書店・二〇〇八)